

# 日本 P T A の原理・研究ノート（Ⅲ）

## ——「P T Aらしい一時期」の活動と運動

杉 村 房 彦

（1986年10月15日 受理）

### Study of the Principles of P.T.A. in Nippon (Japan) (Ⅲ)

— On Various Activities or Campaigns  
done by P.T.A.'s in the Beginnings

Fusahiko SUGIMURA

## 目 次

序 昭和40年代以後の P T A 論多様化の経緯と P T A 研究の課題

I 発足当時に期待されていた P T A の役割・機能（以上、第36巻）

II 発足当時の多様な P T A 論——民間出版物における P T A の役割・機能論（以上、第37巻）

III 「P T Aらしい一時期」（昭和20年代）の活動と運動——P T A の実際に見る P T A 観

タイム・ラグの成立と「P T Aらしい」活動・運動の生成

多彩で独創的な活動と運動

＜健康を守る活動——学校浴場から保育所まで＞

＜地域で文化活動と文化的環境づくり＞

＜ちえをしぼっての学校後援——よしず張りの簡易教室＞

＜本腰入れた要求運動——学校給食継続・特飲街反対＞

＜「地域における社会教育の振興をたすける」活動＞

「親の教育権」行使としての活動

＜授業参加はしたが——「両親の一日入学」＞

＜学校管理への「参加」——親の前で職員会議＞

＜人事にも発言——レッド・ページから教師を守った！＞

### Ⅲ 「PTAらしい一時期」(昭和20年代)の活動と運動——PTAの実際に見るPTA観

#### タイム・ラグの成立と「PTAらしい」活動・運動の生成

本稿Ⅰ、Ⅱ(本紀要36, 37巻)で考察したPTAにたいする行政(占領軍・文部省)の期待や「民」の側のPTA論は、いわばPTAの外側からの期待であり“べき論”であった。したがってPTAは実際には、それらから相対的に独立した動向を見せうるであろうし、事実、PTAの発足後しばらくはそうであった。宮原喜美子は次のように回想している。

学校の主人公は住民だというたてまえは、昭和二二年四月の六・三制の発足以来のものだったわけですが、とくに昭和二三年一〇月に公選制教育委員の最初の選挙が行われたのをきっかけに住民の実感としてひろまりはじめたようでした。／ そのような空気は、朝鮮戦争をさかいに文教政策の転換がはじまり、当時の言葉でいう教育の逆コースの時代にはいっても、私たちの地域ではなおつづいていたのです。PTAについては、長男の五年生・六年生ごろにいちばんもりあがりが見られました。昭和二六、七年ごろです。<sup>1)</sup>

行政の変化にたいするPTAのこのようなずれ(タイム・ラグ)、すなわち相対的独立性は、PTAの組織的な特性によって条件づけられていたと考えられる。占領軍(CIE)・文部省はその当初から、社会教育法(11条, 12条)に抵触するほどに強引なPTA行政を展開してきたが、PTAはやはり行政組織の外にある任意団体だった。「民主論者」(市川達男)<sup>2)</sup>のPTA内的努力によって、行政の期待とは別個の主体的な判断や意志を持ちえたのである。これに加えて、網羅団体ゆえの組織性の低さも、条件の一つとして指摘しなければならない。親全員のいわゆる自動加入制とは、非主体的な、PTAにたいして無責任な会員を多数かかえこむことである。したがってたとえ行政が会長等PTA執行部を従属させたととしても、執行部から全会員へのチャンネルが十分に機能するとはかぎらない。むしろその逆に、PTA執行部の思わくをよそに、行政の意向に相反する動きが一般会員の中から生まれることさえめずらしくない。宮原喜美子たちのPTA改革の努力は、まさにそのような機能不全の間隙を縫って始まったものであった。ここでふたたび宮原の回想を紹介しよう。

学校から役員に依頼されたのは地元の有力者たちで、会長以下理事全員が父親ばかり。規約をつくることになり、役員は総会で無記名投票によって選挙されるという話になると、それは労働組合のやりかただといって会長のとりまきがゴネたということですから、どんな調子のもだったか想像がつかます。／ 長男が二年生になったとき(たぶん昭和23年……杉村注)、道ばただったとおもいますが、近所の同級生のおかあさんNさんと、おしゃべりしているとき、「私たち母親で子どもたちのためになにかやってやれることがあるのじゃないかしら。」という話がひょいとでました。学級担任のU先生もおよびして、二、三人でいちどお話しあいをしてみようということになり、ある日の夕方、Nさんのお宅でその集りをやりました。(略)母親がわはNさん、Sさん、Kさんと私の四人で、みんな三〇歳代でした。／ ここで期せずしてPTA批判がバクハツ。役員だけみたいなPTAはおかしい。商店主や会社のえらい人たちが役員では、学校や地域で

の子どもたちの生活に目がむかないのはあたりまえ。（略）／ まず私たちの学級からやりはじめましょう。子どもたちのことを親たちで話しあうことから始めては？「それはぼくにとってもありがたい。いい勉強になりますよ。」とU先生。／ こうして○小学校の学級PTAがまず長男のいた二年三組からはじまることになりました。それがどうやら軌道にのり、ほかの学級にも波及して、やがて全校的になるまでには三、四年かかっています。<sup>3)</sup>

宮原は学級PTAを場として、「ひょいと」出た話や「期せずして」ばくはつした批判を行動化していったが、なぜそれが可能だったのか。おそらく「封建主義者」の目標は全校PTA（単位PTA）のリーダーシップの掌握であって、学級PTAでの母親たちの話し合いにオピニオン・リーダーシップをどう発揮するか、といったようなことは関心外だったという事情が、また地域社会に存在する支配関係やしがらみが直接持ちこまれるのは地区（部落）PTAであって、学級PTAは地域とよい意味で切れていたという事情などが、学級PTAを一つの「間隙」にしたのであろう。ともあれ学級PTAその他さまざまな間隙に生まれた親たちの自由で主体的な意志と行動こそ、宮原誠一の言葉を借りれば「PTAをPTAらしいものにつくりかえていく」<sup>4)</sup> 努力であったし、また依田康子のいう「独創的なPTAづくり」<sup>5)</sup> への発展の原動力でもあった。

ところで、「間隙」は条件でしかない。その条件を活用してPTAらしい、あるいは独創的な活動や運動をつくりあげていった組織者は、いったいだれだったのか。ここでいう「組織者」とは市川のいう「民主論者」と同じではない。どのPTAにも複数名存在するであろう「民主論者」たちを重層的に見るとき、彼らをPTA内勢力にまとめあげるリーダーの存在に気づくだろうが、それがここでいう組織者である。先の宮原喜美子らの事例については、彼女を組織者と指定することに異論はないだろうが、一般的には組織者はだれだったのだろうか。

岩間正男が描写し<sup>6)</sup>朝日新聞が報じた<sup>7)</sup>ように、早くも敗戦の翌年に新しい教育運動が生まれ発展していたが、その運動の担い手のひとりである親たちが、「PTAらしいものにつくりかえていく」過程に積極的に参加していたか否かは定かでない。むしろ注目すべきは、その発展に見られるいわゆる自然成長性である。たとえば東京都の丸山光子は次のように回想している。

当初はとりあえず校長が会長、副会長が母親だったが、翌二四年度から学校に都合のよい、区議員が会長となった。／ 親と教師が同格であるとするならば、先生たちにお任せという訳にはいかない。会員の有志十数人がPTAの勉強を始め、都社会教育主事の水江八千代先生を招いて話を聞く。話の内容は忘れたが、先生が、「さあ、これから私たちは民主主義を学ぶのです」と云った言葉に、身のひきしめる思いがしたのを、今でも忘れない。又、文部省社会教育課の二宮徳馬氏は講堂の黒板に、円を二つ、三分の一を重ねて書き、「PTAはPとTの相生の精神です」と云って、二重になったところへ「子」と書かれたのが、今でも目に浮ぶ。／ こうした学習の中で当然、保守的な区議員の会長にあきたらず、二五年二月の役員選挙には、学校側の意向に反して、進歩的な大学教授を会長に当選させ、殆ど毎日PTA出勤という、めざましい活動振りとなった。<sup>8)</sup>

自然成長の過程を成立させる条件はすでにPTAの中に醸成されていた。市川は先の文（注2）にすぐに続けて、「しかし対面発言はできないが、内心かれらの行動に不満をもつ親たちの非協力

のために、かれらの計画が思うようにはかどらぬというような情景が漸次現われつつある。」と、「一般の無関心」という現象の底流に生まれている変化を指摘していた。そしてこのような変化があったからこそ、水江や二宮など教育行政サイドの発言も非常に積極的な役割をはたすことに結果したのであろう。ともあれ教育行政が以上のような役割をはたした事実は、一面では当時の教育行政がPTAの「封建主義者」にたいする“開明派”として機能していたことを示しているが、他面では、親の成長・PTAの発展が教育行政からの働きかけを含めてさまざまな偶然を織りこんだ、たぶん自然成長的な過程であったことを物語っている。それが一般的な傾向であったことを、『中央公論』(昭和28年7月)の共同調査「PTAの実態」が次のように“証言”している。

占領軍当局がどんな目的でPTAの設立を勧奨したにせよ、またその内容が学校後援会や母の会と同様のものであったにせよ、それが全国的に組織されて活動を開始して、ある期間を経ると、意図せざる効果をも生み出すようになった。すなわち、組織においても、その内容においても、実質的に「民主的」なものが急速に育てられて行ったのである。／第一にPTAが社会改革の問題をとらえて有力な活動をする母體となり始めた例も生じた。(略)婦人の組織化及び再教育という面からも、思わざる効果が生じた。子供の問題をいろいろな機会に語り合い、或いは討論し合っているうちに、自然に社会問題についての関心を深め、教育の矛盾にも気づくようになったのである。(p.220-221)

「PTA行政の客体(対象)として捕捉され会員にさせられた親」(本紀要37巻p.222)たちは、おくれればながらこのようにPTAの主体として成長し、活動や運動を発展させていった。ところで、その過程に自然成長性が強ければ強いほど、活動や運動がいっそう多様化するのとは当然であろう。昭和23、4年ごろからしばらくは、少なくとも日本PTA(日本父母と先生全国協議会、昭和27年10月結成大会)がスタートする昭和27年まで<sup>9)</sup>続く「新しいPTA活動」(藤田秀雄)<sup>10)</sup>には、素朴な親の思いをひそませた独創的なものが少なかった。

### 多彩で独創的な活動と運動

実際、当時の活動・運動には独創的なものがめずらしくなかった。以下、典型的と思われるものを略述しよう。

#### <健康を守る活動——学校浴場から保育所まで>

東京・台東区立第三小学校PTA<sup>11)</sup>の親たちは積極的に学校に「おしかけて」いた。「学校の運営を自分たちの責任」と考えていたからである。しかし、いわゆる“不当な干渉”をしていたわけではない。行なったことは、たとえば校庭の植樹と縄のれんづくり、校舎の壁ぬり等のいわゆる教育条件整備、さらに紙芝居や小音楽会の主催、学校給食の調理と運搬の手伝いといったようなことであった。これだけでもバラエティに富んでいたといえるが、この他にとくにユニークな活動として「学校浴場」をあげることができよう。PTAの「体育部、保健衛生部では、某会員(病院長)の発言で、学校浴場を設け、はじめ皮膚病罹患児童の治療にあてたが、これが発展して、全児童の

入浴をすゝめ、更にP.T.A全会員の入浴も出来るようにしている」と報告されている。“子どものために”という原則を厳格に守るなら、貧しさゆえに銭湯に行くこともままならなかった当時のこと、このような活動が行なわれても不思議ではない。

もう一つ注目したい事実は、同PTAが「四十数万円の経費でP.T.A会館をつくる」ことを考えたとき、「児童もこの経費の収入のためには、袋はり等したいと申し出ている」ことである。“子は親の背を見て育つ”というが、親たちがそうだから子どもたちもユニークな発想をするようになったのであろうか。

敗戦直後という時代環境は、人びとの関心をとりわけ身体（健康）に向けさせる。第三小PTAではその「関心」は子どもたちのための学校浴場を産んだが、横須賀市の諏訪小学校PTAでは、親自身のための健康相談活動となった<sup>12)</sup>。毎月2回、無料の相談日を設けて、同じくPTA会員である小児科医と産婦人科医にたのんで、いろいろな健康相談から「簡単な診察はもちろん、治療まで」を行なっていたと報告されている。身体への関心が親のための無料健康相談に具体化されたのは、同PTAに＜母親たちのために、母親たちがもっとも希望することを実践する＞という不文律があったからであろうし、またそのような不文律が存在していたのは、「母の会」と後援会が一本化して生まれた同PTA<sup>13)</sup>で前者がイニシアティブを握っていたからであろう。そのことは、PTA会長が当時としてはめずらしく母親であったことにもうかがえる。

同PTAが母親たちの希望（felt needs）や必要（unfelt needs）に真正面から対応していたことは、その他の活動にも明らかである。アンケートにもとづいて行なった性教育の講演会や洋裁、衣服更生の短期講習は「希望」への対応の例であり、幼児保育所の運営（開設は昭和22年9月「母の会」当時）は「必要」への対応であった。しかし、当然のこととはいえ、このように母親たちのための活動に力を入れても子どもたちを忘れることはなかった。たとえば直接的には「働く母親たちの為に」（PTA会長の言葉）開設された幼児保育所にしても、「単なる働く母親のための托児所となることを避け」るために「専門の保母」を3人も置いたり、また「学校側も全面的に協力して、日当りの良い、校内でも一番よい校舎の一部を提供」するなど、子どもたちへのきめ細かな配慮が行なわれていたのである。

### ＜地域で文化活動と文化的環境づくり＞

藤田秀雄は、「岩手県では、一九五〇年度から、子ども会の育成、子どものための校外施設設置（子供会館、子供集会場、子供の広場など）がすすめられたが、これは主としてPTAの運動によるものであった。PTAが子ども会を育成する例も多く、それは県下子ども会の六三・一％であった。」<sup>14)</sup>と述べているが、PTAによる子ども会育成や子どものための施設づくりはいわゆる青少年の「不良化」問題（青少年のヒロポン中毒やその他の犯罪など、後に「非行」の第1ピークといわれる時期であった）を背景にして<sup>15)</sup>、全国的にさかんであった。しかし、「不良化」問題に始まる取り組みだったからであろうか、いわゆる過干渉＝管理主義的傾向が強く<sup>16)</sup>、他方ではその逆に、

過保護＝与えすぎの傾向も現われていたようである。後者の例として、千葉県・市川小学校PTAの「PTA子供文化会」をあげることができよう。同PTAをたずねた田崎正は、文化部長の三木氏と校舎内を歩いたときのことを次のように報告している。

「三木先生、このつぎのP.T.A.いつですか」と元気な声で、すがらんばかりにちかよってたずねる子どももおおぜいおりました。(子どもたちにとって)三木先生はほんとうにしたしめる教室外の先生だとみえます。(略)毎月かならず自分のギセイを忘れて、子供本位に童話・童謡・音楽・美術・舞踊・遊戯・映画・演劇などをてきとうにあんばいしたプログラムのP.T.A子供文化会を開いているので、子供達はそれを待ちこがれているわけなのです。<sup>17)</sup>

この事例では“子どもが主体”の原則はかならずしも明確ではない。子ども会とはひとあじちがう文化会だからであろうか。ともあれ子どもたちは文化活動の受け手＝消費者の位置に置かれている。

もっとも、このような育成・指導上の誤りは、しだいに克服されていったようである。たとえば茨城県・下館小学校PTAでは、役員たちは「子供だとは思えないような悪事が夜を日についておこり、町の親たちは、子供を学校へやることさえ疑問をもつ」という状況に直面して、結局「連夜会長を先頭に幻燈機や紙しばいをもっては全町四、五十個所に出張り、小さい子供の集りをつくっては善導のくさびを打ちこんでいった。」その結果、一年後には全町に子ども会の結成を見るのだが、その子ども会の運営については、それまでの率先躬行とうってかわって子どもたちの自主性にゆだね、親たちは「条件」を示したり（つまり子どもたちに親・おとなとしての要求を示したり）、あるいは「表彰」して励ますなど、協力者の位置に身をひいている。<sup>18)</sup>

仙台市・東六番丁小学校PTAでもPTAの地区委員会が子ども会の指導援助をすることになっていたが、しかし「子供会自体の組織運営等一切は、幼い子供たちの手で行われる」ことになっていたようである。<sup>19)</sup>

子どものための校外施設づくりの例として、川崎市・中原小学校PTAの「中原児童遊園」づくりをあげておこう。土地と各種遊具は市に交渉して公費で購入してもらったが、地ならしや花壇づくりはPTA会員の労力奉仕で行なった。となりの東京都の社会教育主事・田村富次郎は、『講和がなれば、アメリカから与えられたPTAも、またもとの後援会に立ちもどるだろう』と傲然とこう言い放つ人々に、これはぜひ読んでもらいたい」と、その非後援会的活動への称讃でこの報告をはじめているのだが、むしろPTAが、わが子の学校の条件整備ではなく、地域社会の物的環境整備にとり組んだことに注目したい。<sup>20)</sup>

#### ＜ちえをしぼっての学校後援 ― よしず張りの簡易教室＞

ところで学校の条件（施設・設備）整備についても、ただ金をだす、労力を提供するではなく、さまざまなとり組みが行なわれていた。先の田村の報告によれば、川崎PTA研究会の会員でもある中原小PTAの会長は、PTA総会で「川崎PTA研究会では児童のための安定施設として、各

学級に階段を設けることについて、市に交渉中、それについて会員の認識と活動への協力を希望する」と懇請したが、ここに、ただ当局に要求するというのではなく、要求を科学化し運動を緻密に構築しようとする姿勢を見ることができる。ちなみに同PTAの会計に占める公費肩代り負担分はわずかに20%であったこと、そして総会も学級・学年PTA集会も毎月行なわれるのに、田村が訪れた日の総会にはなんと900世帯から300人余が出席していたことなどは大いに注目されてよい。

昭和24, 5年当時のわが国経済はなおどん底にあった。教育財政はきびしく、公立諸学校の教育条件整備をPTA費（私費）に大きく依存せざるをえなかった。しかし、親のふところぐあいはそれ以上に深刻だったから、親の直接負担をできるだけ低くおさえるために、いろいろとちえをしぼらなければならなかった。その一例が東京都・淀橋第四小学校PTAの「二部授業解消」のための「簡易な教室」（3教室）づくりであった。昭和24年4月現在の都下小学校二部授業実施状況は、学級数で5,454学級（区部4,578, 郡市876）の多きにのぼっていた。これでは“わが子に間に合わない”。同小の2年の父母会で二部授業にともなう親の悩みが話題になり、全校父母の問題に発展し、資材と労力をPTAで負担して「簡易な教室」をつくろうということになった。その教室とは「適当に柱をたて、よしずを屋根にして日よけにしたもので、広さは約六坪あり備付けの腰掛があって、一学級の児童が日かげで授業がうけられるようになっている。やがてへちまやかぼちゃ等によって、よりよい日覆をつくる予定」といった程度のものであったが、これで「二部授業」は解消し、しかも費用は全教室で「約七千円」ですんだという。<sup>21)</sup>

#### ＜本腰入れた要求運動——学校給食継続・特飲街反対＞

親と教師がみずから行なう実際活動だけでなく、外に向かったの要求運動にも注目すべきものがあった。その一つが東京都・麴町小学校PTAの「学校給食継続要求運動」である。これは一つの単位PTAが単独で国に直接要求した例として注目される。<sup>22)</sup>

昭和26年8月29日、池田大蔵大臣は「食糧事情の好転した今日、給食の目的はほぼ達し、講和後の自立経済からみても、六・三制予算さえ満足に出ない情勢にある時、給食予算の占める比重は大きすぎる」という理由で、「学校給食予算は採用せぬ方針だ」とラジオ、新聞などで発表した。「講和」条約締結を前にガリオア資金が打切られたことが直接のきっかけだったが、それはともあれ政府内部の対応のちがいが一気に表面化した。文部省は総司令部と大蔵省を相手に「強硬に折衝」を重ねた。なぜ文部省は「強硬」だったのか？　じつは半年前の2月に文部省は厚生、農林の2省とともに占領軍総司令部にたいして、「対日援助が打切られても、完全給食は、日本政府の責任において継続する」と伝えていたが、その継続計画策定のために「学校給食に関する世論調査」（5.14～6.2）を行ない、国民の大多数が給食を肯定的に評価し、今後の継続を希望していることをつかんでいたからではないか。

文部省の「強硬(な)折衝」が広く知れわたり、継続要求運動は急速に高まった。全国給食関係者、PTA代表者数百名が陳情運動を起した。全国PTA協議会、主婦連合会、日教組なども街頭に進

出し、署名運動を実施、新聞ラジオを通じ世論を喚起するなど猛烈な運動を展開した。このような世論の動向を背に、麴町小PTAの運動は始まったのである。『P.T.A教室』(昭和26年11月)の「各地だより」は、そのようすを次のように伝えている。

ここは全国のPTAに先がけて学校給食継続運動を強力にするために立ち上ったPTAです。金曜日(の緊急総会)というのに、四〇〇世帯から一二〇名の会員が出席。(校長の給食継続必要のアピールに続いて)PTA副会長の石井幾久子さんが、東京都小学校PTA協議会の地区代表委員としてこの運動に参加した体験を報告(略)。次に都教育庁の松本主事から専門的な給食の知識を得て、「給食継続の実行方法」を議題としました。切実な問題ですから熱心な意見が出ましたが、次のような決議を得て、九月十日実行しました。(1)給食継続陳情運動を至急決行する (2)石井副会長提案の決議文を持って行く (3)陳情先は池田蔵相、天野文相、自由党三大政党 (4)実行委員は学級委員六十五名に有志会員を加え、石井副会長を指導者として、五班編成(p.20-21, 挿入は杉村)

全国的運動は「ついに一時給食中止を食いとめることに成功」という成果をあげて終わったが、この「成功」を支えた力について神崎清は、「これ以上の給食費の負担にたえられないという母親たちの声が、この反対運動の大きな電源になっていたのである」<sup>23)</sup>とまとめている。

当時の要求運動のもう一つの典型が、「地元ボスとのはげしい争いでやっと成功した」<sup>24)</sup>といわれる、東京都大田区・池上小学校PTAの「特飲街設置反対」の運動であった。『日本PTA』誌編集部の児玉佳子は、<「つい先頃池上本門寺近くに特飲街が作られようとしていた」→「反対の声は井戸端会議からPTAの議題へひろがり」→「世論に訴え」→「参議院にまで持ちこまれて」→「母親の、PTAの勝利」>と概括したが、以下、彼女の報告<sup>25)</sup>によって「勝利」までの経過を見る。

汚いものほど美しく飾られる。業者たちは「本門寺の復興」(仏が喜ぶ?!)「土地の繁栄」の美名のもとに、特飲街設置を急ピッチで進めた。昭和24年7月末に工事(「地もり」)に着手。それと並行して「某政党」のビラ、チラシで、特飲街の予定図とともに、池上警察署の前署長の「町が繁昌してよかろう」との談話を広報したのは効果的だった。政府与党と警察が後押ししていれば、住民の腰は重くなる。「学校の先生方も、母親たちも、地元の人たちも、反対はしたいが、某政党の運動だからというようなことから、はっきりと反対の声をあげるのを控えていた。事実、二十五年八月二十五日にはじめて池上小学校PTAに、父兄よりこの問題がもち込まれ、早速三十日には役員会を開いて、反対署名陳情の運動をすることに決まり、その代表が警察に陳情に行った際、意外にも“赤の手先になっている”とまでいわれたのだった。この為に反対運動は出鼻を挫かれ約半月、ひとびとは手の下しようがなかった。」建物群は「みるみるうちに出来上って」、開業を待つばかりとなった。

他方、9月中旬に新聞でことの次第を知った大森高校PTAは、近辺11校のPTAによびかけて10月2日に会合、11PTAは団結して「どこまでも反対運動を進める」<sup>26)</sup>ことを決定、「池上特殊喫茶街反対学校連盟」をスタートさせた。以後、各方面への陳情と世論喚起の運動とを活発に展開することとなる。都教育委員会、建設局、建築局、池上署長、大田区長等に陳情したが、いずれも



「どうにもできない」との回答。そこで10月16日関東民事部に陳情すると同時に翌17日、都議会に1万2,000人の署名と陳情書を提出した。都議会はこれに対応、都教育委員会も「社会正義の上から世論により学校教育の純正を守ってほしい」と声明。他方、PTAの側はひき続き池上特飲街設置反対大田区PTA大会（10.28）、特飲街反対全都PTA大会（11.14）を行ない態勢を強化した。かくて参議院の文部、厚生両委員会、占領軍関東民事部が実地調査にふみ切る、という経過を経て、「遂に業者も止めてよいと申し出て、出来上った建物も都として買上げを考えているところまで具体化して、漸く解決の糸口がついた」のであった。

経過は以上のものであったが、この運動をどう評価するか——参議院議員・坂西志保は「一九五〇年の婦人のした仕事の中で一番大きな貢献だった。」といい、文部省PTA審議会委員の神崎清は「この勝利の記録は、戦後砂のようにくずれかけていた日本人の道德感覚が見事に立ちなおってきたことを見せたばかりでなく、学校を中心として、あたらしい地域社会をつくろうとする民主教育の理想や、日本の未来をかけた児童福祉の思想が、いつのまにか日本の市民の常識になっていたことを物語るものであった。PTAの旗の下にあつまった市民たち——まずしい会社員や労働者の妻や薄給の教師のあつまりであるが——は、その運動の過程において、彼らの目のとどかないところで、どんな暗い政治がおこなわれていたか、納税によってやしなわれている役人が、誰に奉仕をしていたかということを身をもって知ったのである。」と評価したが、いずれも過大評価とはいえない。

第1に、たしかにこの運動を通して池上の母親たちも、池上以外の地域の母親たちも成長したからである。前者についての“証言”として、ある教師の「正直なところ『赤の手先』と云われたことが恐ろしく、それを押して反対をとる勇気がなかったのです。ところがお母さん方は、それらの声や又業者たちの圧迫にも負けずに、本当に純粹にPTAとして起ち上って下さったのです。われわれはそういうおかあさん方に勇気づけられた形です。あの熱心さには本当に感謝しています。」という感想を、後者についての“証言”として、池上地区外のある母親の、「最初新聞でみたとき、離れたよその地区の事なので無関心でいました。(略)国会にまで持ちこまれたと聞いたときに、はじめて私は考えてみたのです。そうして自分本位の私を恥ずかしく思いました。同じ問題ではなくても、いろいろな悪がいつどこから私の身にだってふりかかってくることも知れないと思うと、池上のおかあさんたちの問題をよその火事として手をつかねて眺めていたおろかさを反省いたしました。」という反省をあげるだけで十分であろう。<sup>27)</sup>第2に、翌年には東京王子・亀有のPTAでも特飲街設置反対運動が始まるなど、池上の運動によって、特飲街が計画されていた他の諸地域の「父兄の目が開き」「計画が取り止めになった地区も出て来た」ことをあげておこう。

#### ＜「地域における社会教育の振興をたすける」活動＞

教育活動にも注目すべき事例があった。「父母と先生の会（PTA）第1次参考規約」の第2条の9、「その地域における社会教育の振興をたすける」にそった活動である。千葉県・木下（きおしろ）<sup>(ママ)</sup>

小学校PTAの「民衆講座」(昭和22年)の実践については、本稿I(本紀要36巻p.183-184)に紹介したが、東京都・目黒区第十中学校PTAの教養講座<sup>28)</sup>は実施回数の多さと内容の多様さにおいて、木下小PTAのその比ではなかった(表1参照)。

成人教育の振興は春の総会で決まっていた方針だったが、教養講座の総経費「四万円」——講師の大半が無料奉仕のPTA会員であり、外部講師も「僅かの謝礼」だったから、4万円ですんだのだが——という金額に、会員の中に「こんな派手なことをするならば、月々の会費を下げてほしい」という批判もあったらしい。また内容の質と量についても、「たかが新制中学のPTAで破天荒だ」とかけ口をたたかれもしたという。しかし、これはPTA「本来の仕事」であり、また「四万円」も会員1人当りにすると年45円の負担にすぎないこと、そしてなによりも、「今迄役員だけのPTAでありがちだったが、会員全部、ひいては会員以外の地域社会の人々にもPTAというものに関心をもって貰うために」ということで、「ともかく押し進め」、その結果は「聴講者は又来年もという希望が圧倒的」だったというから、一応成功したといえよう。

この講座の注目すべき点として、第1にわかりやすさをあげることができよう。「少々むずかし過ぎる」「喰いつきにくい」という批判もあったらしいが、しかし、多くの中学生が親とともに参加し、たとえば平沢和重氏の「時事問題解説」について、「よくわかったわ。明日から新聞見よう」

表1 目黒区立第十中学校PTA「教養講座」

プ ロ グ ラ ム		於十中本校々舎 特に断りのない場合は夕七時半より		
8月 2日(水)	時事問題解説	ラジオ「ニュース解説」担当者	平 沢 和 重	
3日(木)	原子力の話	横浜大学教授 理・工学博士	北 川 徹 三	
	シベリア抑留3年	元満洲航空社長	藤 田 朋 子	
5日(土) 1時半	菓子の作り方	友之会 会 員	松 本 延 子	
8日(火) 1時半	思春期の心理と指導	学芸大学教授	坂 本 一 郎	
8日(火)	朝鮮事件と私達の経済	ダイヤモンド社 取締役会長	石 山 皆 男	
	囲碁の話	前 本 因 坊	岩 本 薫 久	
10日(木)	絵画の話	元春陽会 会 員	三 吉 亮 秀	
	詩の朗読	十 中 教 諭	時 岡 茂 子	
12日(土) 1時半	レース編物講座	十 中 教 諭	小 島 桂 子	
13日(日)	PTA八月絵会	(JOAK 藤倉修一氏講演予定)		
14日(月) 1時半	人形の作り方	十 中 教 諭	小 島 桂 子	
16日(水) 1時半	料理講座		関 操 子	
17日(木)	新教育の話	十 中 校 長	太 田 益 治	
	映画の話	都 指 導 主 事 員	太 田 益 治	
18日(金) 1時半	服掛講座		和 田 桃 子	
18日	吹奏楽の夕		警視廳音楽隊	
19日(土) 1時半	家庭生活問題の研究		山 田 多 嘉 子	
22日(火)	イギリス文学の話	東 大 助 教 授	朱 牟 田 夏 雄	
	古美術の話	十 中 教 諭	北 島 精 六	
24日(木)	江戸趣味の話		本 山 荻 舟 治	
25日(金)	山の話	天然色映画使用	塚 本 閣 治	
26日(土) 午前9時より 午後4時まで	都 染 講 習	(晝食携帯のこと)	都 染 本 舗	

という気持ちになった生徒もいたと報告されている。第2に“一石二鳥”性である。たとえば昼間の講座での“マクラメ編み”は「お互いに話し合い乍ら出来る内職仕事」であり、できればもう少しよくなればまとめて百貨店に卸すという話までついた上での講座であった。そのことを主催者は、「こんなことにも趣味の域を超えねばならないような日本の経済状態では、本当に婦人の娯楽にとる時間などは思いもよらないようだ」といいながらも、すぐに続けて「…が、こうして楽しみ乍ら、生産的な仕事をし子供につながる母親たちが又お互いにつながりあってこそ、PTAの進む姿というのではないだろうか。」とまとめている。

しかし第3に、昭和40年代になって一時顕著になったPTAの成人教育活動の偏向、すなわち“趣味と実益”指向が、ここで先取りされていることを指摘しなければならない。参加した母親の1人は「母親も台所から出て家事から解放され、学問の世界に、また趣味の境地に入ることは、どんなに生活を明るく新鮮にすることだろう。」と評価したが、しかし他方に、“趣味”や教養としての“学問”のオン・パレードによって、「苦しい家庭経済」という日常生活実感——朝鮮戦争特需ブーム以前だった——を逆なでされた会員も少なくなかったはずである。「こんな派手なことをするなら、云々」の批判も、金額の問題としてより、そのような文脈で理解すべき問題であったのではないだろうか。

もう一つ、仙台市立東六番丁小学校PTAの「青年学級」開設<sup>29)</sup>にも注目したい。同PTA自身、「PTAが地域社会に働きかける一つの例」と表現していたが、地域への働きかけを青年にしぼったところに特徴がある。「授業は夜、一週二回、学校の一教室を提供、約四十人位。経費はすべてPTA負担。講師には、学区内の有能な方、大学の教授、新聞社の方など」。学級生は「学生、工員、会社員、商人といろいろ」。学級生たちは彼ら自身のグループ研究会を持っていて、音楽、文学その他の学習やレクリエーションもさかに行なっていた。授業を持たない教師が1人、専任で青年学級の世話をし、他の教師たちは「精神的な協力」。なお青年学級の修了者たちは、地域で「不良化防止運動を展開している」と報告されている。

### 「親の教育権」行使としての活動

以上に略述したように、「発足当時」からしばらくは、各地で多彩なPTA活動や運動が展開されたが、次に“学校教育にたいする親の教育権行使の方法としてのPTA”という視点から、いま一度当時の活動や運動を考察しよう。

#### <授業参加はしたが——「両親の一日入学」>

10年ほど前、熊本県球磨郡のある中学校で、親の授業参加——参観ではない——が実施された。理科（化学）の授業で母親たちがおそろおそろ試験管をにぎっていたこと、1人の父親が薬品の飛沫で野良着に小さな穴をあけ、その穴をしきりに指先ではいていた情景など、親たちがすっかり授業にとりこまれはしゃいでいたことが思いだされる。ところで、そのような親の授業参加の試み

がすでに早く昭和26年に東京都新宿区のある小学校で行なわれていた。戸塚第二小学校PTAが主催した「両親の一日入学」の活動がそれである。同PTAは昭和26年度「月別活動目標」の「九月の主題」に「新教育の理解と民主的訓育のあり方について」をあげ、具体的な活動プログラムの1つに「一日入学」を決めていた。以下、その実施当日のようすなどを田村富治郎のルポルタージュ<sup>30)</sup>に見よう。

では、一日入学した会員から、当日の模様をきいてみよう。／ 午前九時半に朝礼。子供のランドセルに今日習う算数・国語の教科書・ノートをたしかに入れ、鉛筆もけずって晴れの入学式に遅刻しないように家を出る。妻や子供に「行って参ります。」と挨拶して妻子の笑い声を後にした。(略)朝礼合図のベルは丁度九時半。子供たちはきちんと整列。臨時の大供たちは並ぶにも、テンヤワンヤの大騒ぎ。御無沙汰の挨拶で子供の友だちのおとうさん、おかあさんと気忙しい談笑の最中だったから無理もないが。(略)／ 十時から二時間の授業で、最初が算数次が国語だ。(略)先生の問は誘導的で親切な心が感じられる。算数で質問されたが、職業がらお手のもので子供よりよかったらしい。校庭で紙飛行機を折って飛ばしてワイワイ騒ぐ大どもの入り乱れての大さわぎは理科だそうだが、なるほど新しい教育の子供は明るいわけだ。(略)／ 午前十一時半、授業終了。給食は待ち遠しい。空腹のせいではなしに。子供がかれこれ言っているその物に接する期待である。(略)おいしかった。「今日は特別なんじゃないありませんかしら」という声を聞きつけて、先生がこの機会とばかりに六〇〇カロリー、蛋白二五グラム実費いくらと説明される。諒解。これに応じた合理的な食生活改善は妻の仕事だ。

昼食後にそれぞれの学級で担任教師を囲んで学級懇談会が行なわれたが、そこで出た親たちの感想や反省からいくつかを紹介すると、

「どんなに先生方のお仕事が難しいか分った。

「子供の理解は、その生活を知り体験をすることが出発点だ。読書の知識だけでは誤解がある。

「子供は子供らしく、明朗に率直に、自主的に。自らの力で自ら道を切り開く力を見出し、伸ばし、育てるのが教育だと、分って来た。

「算数の『目測』は始めてのお方が多いようだが、実生活は、自分の会社のことや妻の家事を見ても、ほとんど目測の計算の継続だ。その中に算数の基礎のある新教育の行き方の一つが諒解されたように思う。国語では『呼びかけ』の活動的で劇的で詩の力が、私自身の中にあるものに訴えて来るように思ったこと。<sup>(ママ)</sup>形ばった朗読に縛られた旧い教育のわくとは全く異なる個性の発見と表現の實際を味って新教育のよさが分ったように思うし、特に一貫した先生の指導に御苦心を知った。

「学校の新しい教育の方法や教科書の内容の一端を理解して、あわせて両親と先生とが更に一段と親しみを増すように」というねらいは、みごとにあたったといえよう。親の1人が「子供の理解は、その生活を知り体験をすることが出発点だ」と感想を述べていたが、「新教育の理解」についてもまったく同じことがいえよう。この活動を企画した企画委員会は「新教育の在り方を理解体認する」(下線は杉村)という表現を用いていたが、親たちは理科の授業で「ワイワイ騒ぐ大どもの入り乱れての大さわぎ」を見て、戦後教育の“さわがしさ”を“明るさ”と理解しなおし、あるいは算数の授業で実際に「目測」の勉強をして実生活をふりかえり、「新教育の行き方の一つ(を)諒解」したのであった。

「両親の一日入学」がそのように、「新しい民主的教育に対する理解を深め」（「PTA第1次参考規約」第2条3）る方法として、すばらしいくふうであることはたしかである。しかし、戸塚小PTAの親たちは「理解」してそれからどうするといふのか、という問題が残っているのではないか。「参考規約」は先の条文にすぐに続けて「…を深め、これを推進する。」と定めているが、戸塚小学校の新教育の「推進」に親たちはどのように参加するかについて、田村のルポルタージュはなにも述べていない。「一日入学」についての4年生女兒の作文に、「おかあさまたちが勉強をおそわって行けば、宿題が出て分らないところなどは、昔のことなどをわたしたちに教えて、先生のやり方とおかあさまのやり方と、どちらが本当か分らなくならずにすみます。」と書かれていたが、なるほどそのような実際の効果もあろう。しかし、それは学校教育の延長であるホーム・ワークにおける“助教師”としての協力でしかない。「月別活動目標」の各月の具体的活動プログラムを見ても、たとえば8月（夏休み）は「校外指導」「夏季施設への協力」、10月は「運動会への協力、有効な参加」といったものが並んでいるなど、親＝PTAの活動領域は学校教育以外の活動と学校の教科外活動に限定されている。学校教育以外（家庭、地域）の活動に学校教育との一貫性を持たせるために、「新教育の在り方を理解体認する」ということであろうか。

運動会その他の教科外活動については、「共催」にまで進んだ例もあった。大分市・荷揚町小学校PTAは本稿Ⅱ（本紀要37巻p.231）に紹介したように、運動会、学芸会、展覧会、園芸品評会等を学校と「共催」し、東京都・不動小学校では昭和25年以来、運動会を学校とPTAの「共同主催」とし、親と教師が「一体」になった運動会運営（専門）委員会をつくってすべてをとりしきってきた。<sup>31)</sup> このように教科外活動については親＝PTAの参加は一定の前進を見せていたのだが、教科領域への参加の例を探すのは難しい。荷揚町小PTA会長の河野春馬は、「P.T.A将来の構想」<sup>32)</sup>の中で、「段々研究を進め、理解を深めて、将来は教科書の編さんにも我々父母の力をそそぎこみたいと考えている。」と、教育の内的事項の“核心”への参加に論及していたが、しかし、それはまだ構想でしかなかった。（そこまで構想していたということ自体がめずらしいことであった）

#### ＜学校管理への「参加」——親の前で職員会議＞

教科領域への「参加」の低調さと対照的に、学校の管理・運営面への「参加」志向は非常に強かったようである。たとえば

京都の第1軍団軍政部が昭和22年2月に作って関係者に配布したPTA（育友会）のモデル規約を、早くも同年12月に改訂し、第2条（目的、方針の条）に「本会は学校管理の方面を指令したり或は学校の方針に干渉しません。」の一文を付加しなければならなかった事実<sup>33)</sup>

あるいは昭和24年度に東京都教育庁が行なった調査——調査票はたぶん学校サイドに配られたのであろう——で、「都内公立学校PTAの事態から今後警戒を要するものとして報告されたもの」の中で、「比較的多い事項」のトップに「学校経営に対する過度の発言」があげられた事実<sup>34)</sup>

さらに埼玉県の前校長たちがある座談会で交ごも、「日本のPTAは少し学校に接触しすぎはし

ませんか。(略)学校の内部の問題に立ち入りすぎる」「だからPとTが対立するんですね。」「ある学校では、校長室で校長の机のとなりに、PTA会長の机がおいてあったりしましてね」と批判していた事実<sup>35)</sup>

などは、学校の管理・運営面へのPTAの発言がさかんに行なわれていた“証”であろう。

ところで第1軍団軍政部の措置はともかく<sup>36)</sup>、都の調査結果と座談会での校長たちの発言はただちに信用するわけにはいかない。いずれも教師(校長)の見解だからである。周知のように、天皇の大権事項として囲いこまれてきた戦中・前公教育体制の中で、教師は天皇の最下位の名代=末端の教育官僚として親に君臨してきた。そのような親と教師の負の関係をいり濃くひきずっていた敗戦直後の教師たちにとっては、“口出し”の範囲や程度のいかにかわらず、親が“口出し”すること自体が「過度」であり、「立ち入りすぎ」であったからである。実際、調査結果や座談会では、“PTAからの発言”と十把一絡にされているようだが、校長室にPTA会長の机を置くといった類のものばかりだったわけではあるまい。一般の親たちは、当時の親たちはなおのこと、そのような“だいそれた”ことなど思いつきもしない。もともと、親と教師は対等か、とか、親は学校(教師)にものを言う権利があるのか否か、といったようなことは念頭にさえないといつてよい。ものを言う場合も、言う必要があるから言う、必要がなければ言わないといういわば内発的な、親として自然な行為であろう。そのような行為にあえて「権利」という言葉をかぶせるなら、それはもっともプリミティブな「親の教育権」の自覚——プリミティブであるから「自覚」とさえいえないかもしれない——と行使であったといえよう。

そのような「自覚と行使」は、もちろん敗戦後に始まったことではない。明治6年から数年間、各地で激発した「学校焼打ち」事件は「親の教育権」の拒否的行使であったし、大正末期の農民小学校運動は積極的な行使であった。かれら民衆は「教育権」という言葉を知らなかった。しかし、新潟県木崎村の農民たちが「土地数え唄」の替え歌に、「とりかえし」という言葉を使って「十とせ とうとう教育とりかえし 此世ながらの極楽土」とうたったように<sup>37)</sup>、民衆にとってわが子の教育はあくまで親のものであった。その自覚が、「学制」後半世紀を過ぎてもなお鈍化していなかったという事実、「親の教育権」が自然権であるゆえんを知ることができよう。ともあれ親にとって、「おらが村の小学校」とは村立小学校ではなく、その親をふくむ村民立小学校であつたろうし、したがってまた学校教育全般——親の気持ちでは教育とはつねにトータルなものであつて、内的・外的事項といったような区分はない——への“口出し”も、親として当然の行為であつたろう。宮原誠一は「わが国には、こと公教育にかんして、有志の父母による民間運動というものの伝統がありません。」と指摘し、その原因を「共同体的規制」に見ているが<sup>38)</sup>、宮原の指摘や見解を肯定しつつも、同時に、公教育の「公」が「村」ではなく「村民」の意にうけとめられているのであれば、公教育に対するものとしての民間運動がおこらないのは当然とも見なければならないのではないか。

敗戦後も「おらが村の学校」意識は消えなかった。消える条件がなかった。むしろ大都市では戦災焼失校舎の復興に、農村でも新制中学校の新設に地域住民の協力を必要としたことが、その意識

を強化した。そしてPTAのスタート、その後のコミュニティ・スクール論などがその意識を正当化した。PTAの親たちの学校にたいする発言を、以上のような文脈でとらえるとき、京都府・弓削小学校と同PTA（育友会）の“親の前で職員会議を”の実践は、以上に略述したいわば伝統的な親参加を、近代的学校管理に適合させたユニークな試みだったといえよう。以下、その実践を同校教諭・磯部光治の論稿<sup>39)</sup>によって概観しよう。

同校とPTAの活動は、①地域別小集会 ②家庭訪問 ③『育て心』（育友会報と学校報をかねた月刊誌）④「村の学校」の日（農家はいそがしいが、「せめて月一回」ぐらい親子が結び合おうという日）の設定 ⑤家庭調査 ⑥教育座談会 の「六つの方策」にそって行なわれていたが、“親の前での職員会議”とは①の「地域別小集会」のくふうの1つだった。「農閑期を除いて昼間に保護者たちとゆるゆる話すことなどできないので多くは夜分になる。夜おそくまで学校側から代表者が出て長談議をしたこともあり、又次々と弁士交代で種々の問題を保護者に話し掛けた後、質問や意見交換をやる等の方法もやってみたが、どうも、浅くて広いお座なりの話し合いに終って一向に明日の教育に子等の生活の建設に生きてこない。度々職員会でこれが方法について吟味した結果、『職員会を保護者の前でやろうじゃないか』の意見が出た。窮しての一策であった」。

手順は、まず事前に親の声（「子供の教育上の疑問、子供の問題で困却している点など」）を聴取し、次に「教師は各人で学校に現れている各種の資料を準備したり、自分の意見をまとめたり、又は日常の実践方策や、指導実例を用意」する。そして当日、親たちの前でパネル・ディスカッション。「窮しての一策であったが思いがけなく結果がよかった。」「全く飾らず率直に保護者のあり方についても語り、学級担任の学級経営、指導方法についても遠慮なく批判する。子供の実態もさらけ出される。熱がこもって、保護者からも座長の許しを得て発言があり、校外の子供の実態が出てくる。」「どの先生がどう考えるか、日常小さな問題についても、教師たちがその力なりに真剣にとり組んでいることを知ってもらえた。」

親たちの面前で教師たちは相互批判をする。／ 親をも批判する。もちろん配慮はいろいろに行なわれただろう——「子供の実態」のさらけだし方などは、配慮が不可欠だ——が、それにしても勇気のある実践であった。これほどの実践がありえたのは、一つには「六つの方策」にも明らかなように、同校の教師集団に＜親・地域と日常的に結び合おう＞という姿勢があったからであり、二つには、それゆえに親たちの教師たちにたいする信頼が形成されていたからであろう（信頼がなければ、“教師のあらさがし”にこれほどかっこうの場はない）。

親の発言もあったが、原則的には親は傍聴者である。＜討論→決定＞の過程は直接には教師のみが担って進行した。しかし、その過程は、事前に聴取された「親の声」をもとに進行したこと、また親たちの面前で行なわれたので、親たちが討論や決定をどう思っているかを、教師たちはおそらく過程の進行の節ぶして理解できた（理解できれば、教師のその後の思考は一定の影響をうけることになろう）ことなどにより、親はたんなる傍聴者ではなかったというべきであろう。この過程こそ、学校の管理・運営にたいする親の要求の「非強制的受容の過程」である。

### ＜人事にも発言——レッド・ページから教師を守った！＞

“PTAべからず帳”のトップに書かれるのは、「教師の人事に口を出してはいけない」であろう。発足当時もそうであった。学校の管理・運営については「干渉」となる言動が不可とされたのだが、人事については発言の内容のいかんにかかわらず、一切が不可とされていた。しかし、なぜいけないのかは、当時も、今日もお十分に説明されているとはいえない。自明のこととされてきたのであろうか。たとえば毎日新聞の記者・牧野誠一は

④ 去年（昭和24年……杉村注）三月末の定期異動で、ある中学校の校長が高等学校の校長に栄転した。りっぱな校長であるが、受け入れるがわのPTA会長は、その教頭を校長にさせたかったので反対した。その会長は、学校の復興について非常に力をつくしていたので、当局としても発令したのだからかまわず赴任せよともいえず、一カ月そのままになっていた。結局、PTAは人事にまで立ち入るなどの世論に推されて、その校長は赴任していったが、長つづきしなかった。何かとうまく運営がしにくかったらしい。教頭はそのあとで校長になり、会長は思いをとげた。⑤ また去年十月の整理では、あるPTAの役員は、あの先生はりっぱな人なのに、どうしてクビにするんだと県へどりこんできた。これは容れられるはずもなかったが、PTAがいかに人事に立ち入っているかを物語るものだ。<sup>40)</sup>

と書いていたが、彼が、教師の人事にたいするPTAあるいは親の発言行為を無条件に不可としていたことは明らかであろう。④の事例について、PTA会長の判断（＝人物評価）が正しいか、発令者のそれが正しいかと問うことさえしていない。問うこと自体が逸脱だというのであろう。⑤の事例については「はずもなかった」という表現を用いているが、なぜ「はず」がないのかについては説明がない。これも自明の理<sup>はず</sup>ということなのだろうか。

ところで、教育行政当局、教師（校長）その他関係者がこのように、教師の人事にたいするPTA、親の“口出し”をしきりに否定していたその他方で、一般の親たちはもっと素朴に言動していた。たとえば東京都・国分寺第一小学校PTAの親たちの場合である。同PTAの会員だった牧瀬菊枝は次のように回想している。

PTAの中で、一人の先生をクビにするか否かが問題になった。この先生は、生徒たちの信頼も厚く、クビにすることは、みんなに不利であった。だからみんな反対した。校長ひとりがはっきりしなかった。それを一同は不満として、いきりたった。多勢に無勢、校長の立場はいかにも不利だった。ついに校長は自分の意見をひっこめた。／これがのちに続くレッド・ページの始まりである。日本の教育界全体を大きくゆさぶるレッド・ページの前哨戦であった。<sup>41)</sup>

親たちは「レッド・ページの前哨戦」をたたかったが、もちろんそれと自覚してたたかったのではない。多くの親には事態を政治の文脈でとらえる習慣がなかっただろう。ただ＜生徒たちの信頼も厚い教師を、なぜやめさせるのか＞という素朴な疑問と、＜よい先生を失いたくない＞という親心が、親たちをそこまで行動させたのではないだろうか。したがってまた＜PTAは人事に“口出し”できるか否か＞などと、ことさらに考えることもしなかっただろう。<sup>42)</sup>それは牧瀬ら親たちにとっても、牧野とはまったく逆の意味で自明のことだったからである。牧瀬は先の文にすぐに続け



て、「この戦いを勝ちぬくことが、教育界にとっての大きな課題であったが、そのころのPTAは、その役目を果たせなかった。」と書いているが、果たせなかった原因の1つが、PTA・親は教師の人事に“口出し”すべきでないという、教育行政その他によって流布されていた考え方にあったことを、その「考え方」にまったく縛られていなかった国分寺第一小PTAの“成果”が証明したといえよう。ところで、同PTAの親たちは、なぜ教育行政流の「考え方」に縛られずに、素朴に“口出し”したのであろうか。同PTAに特殊個別的な原因の有無を明らかにできる資料がない<sup>43)</sup>。ここでは、同PTAでは行動へと顕在化したが他PTAの親たちも潜在的に保持している、いわば無自覚の前提的意識はなにであったのかを推論しよう。

赤羽王郎（長野県出身・故人）によれば<sup>44)</sup>、戦前の長野では、村の学務委員の一番だいじな仕事といえばよい校長を探すことだったという。よい校長を迎えると、その校長を慕うすぐれた教師がついてくる（転任してくる）から、村の学校はよくなるという次第。それで村の重役たちはその時期になると、「〇〇村の校長は…」「△△校のだれそれは…」と小耳にはさんだうわさをたよりに、学務委員を各地に赴かせる。彼らが帰村すると、待ちかまえていた重役たちは開口一番、「ものはどうだ？」と、おめあての校長の人がらをたずねたという。教師が天皇の名代であった時代においてさえ、実際にはこのように住民が教師の人事をとりしきっていた事実は、大いに注目されてよい。ここにも「おらが村の小学校」意識が明瞭である。直接にことを行なったのは重役たちだが、しかし、親たちの願いに責任を負っての人事への関与だったからこそ、なによりも「もの」＝人がらに注意をはらったのであろう。

ところで以上の事実は、国分寺第一小学校PTAの親たちの「無自覚の前提的意識」を象徴的に説明しているのではあるまいか。第1に、＜教育は結局、教師次第だ＞という民衆それぞれの被教育体験にもとづく知見——それは教育原理の民衆的確認である——であり、第2に、教育のこと（教育の専門的事項）はわからないが教師のこと（人がら）ならわかるという経験的自信である。校長の人がらに最大の注意をはらった村の重役たちは、「教育のこと」は校長にまかせっきりだったという。いわゆる教育の外的事項についてさえ“口出し”せずに、校長が要求した予算をそのまま承認したという。＜校長の人がらを見誤ったはずはない＞という自分たちの“人を見る目”に自信があるからこそ、全幅の信頼だったのではないか。国分寺第一小PTAの親たちを支えたものの1つが、同じく“人を見る目”への自信——それは意識下のものであったろう——ではなかったか。このように考えると、「教科領域への『参加』の低調さと対照的に、学校の管理・運営面への『参加』志向は非常に強かった」（本紀要 p. 221）という当時の一般的傾向も、“餅は餅屋に”の謙虚さと、“人を見る目”への自信という2側面から説明されることも必要ではないだろうか。

## 注

- 1) 宮原喜美子「昭和二〇年代のPTA」、『PTA研究』42号, 昭和50年6月, p.8
- 2) 「昨年一年間のPTAの全国的な動向を眺めると大体次の二種に大別することができるのではなかろうか。  
／(1) 大都市では民主論者の反撃を受けながらも、一般の無関心さと現存の社会的地盤を利用して、依然として封建主義者がPTAを支配しているところが多い。」(市川達男「新教育の批判」、『社会と学校』昭和25年1月, p.40)
- 3) 宮原喜美子・前掲(注1に同じ)p.7-8, 下線は杉村
- 4) 宮原誠一『PTA入門』(国土社, 昭和42年刊)p.59
- 5) 依田康子「後援会PTAの足跡」, 日本キリスト教団全国教会婦人会連合会教科書問題小委員会『戦後教育の中のPTA』(限定プリント版, 昭和51年6月刊)p.26
- 6) 岩間正男「児等を愛するがゆえに」, 『婦人公論』昭和22年3月, p.82(本紀要37巻p.256参照)
- 7) 昭和22年11月15日付の朝日新聞は「六・三制を守れ きのう国民大会開く」という見出しで、次のように報じている——「六・三制完全実施国民大会は十四日正午から宮城前広場で日教組、労働団体、文化団体、父兄代表、学生生徒児童代表ら五万余名が参集して挙行、予算削減反対を決議して代表が国会で片山首相、森戸文相に決議文を手交した。(略)首相は、六・三制の予算は七億に削ったのではなく財源が出来次第追加予算あるいは予備費として出すことにきまっていると答えた。」(下線は杉村)
- 8) 丸山光子「PTAで学んだ民主主義」, 『PTA研究』159号, 昭和61年1月, p.10
- 9) 宮原誠一はむしろそれから後、昭和30年ごろまでを、運動がぐんと高まった時期としている(宮原誠一・前掲, 注4に同じ, p.61)が、私が「少なくとも……昭和27年まで」と限定したのは次のような認識からである。(1) その年の日本PTAの発足は本論で後述するようにPTAの相対的独立性を否定し、自由な活動や運動を抑止することをねらいとしていたが、それに加え実際のスタートが「講和」条約以後、CIEが手を引いて後であったために、旧支配層＝「封建主義者」が日本PTAのリーダーシップを掌握し、いわゆるアメリカ民主主義をさえ否認していった。したがってそれ以後の「民主論者」たちの努力は「PTAの民主化」に焦点化され、その結果、本来のPTAらしい活動や独創的な活動は相対的に弱まったのではないか。(2) 日本子どもを守る会(昭和27年5月結成大会)の成立、母と女教師の会(昭和29年)、日本母親大会(昭和30年)等の開始に象徴されるように、同じく昭和27年を転機としてPTA以外の教育運動が生まれ発展していったが、そのことはPTAにたいして、「民主論者」の“PTA離れ”を促進するという結果をもたらした。心ある親たちのPTA内的努力の弱まりは、PTAの非民主化・行政への従属を強めただけでなく、PTA活動・運動全体を沈滞させることになった。
- 10) 藤田秀雄「日本におけるPTAの歴史(その2)」, 立正大学『文学部研究紀要』第1号, 昭和60年3月, p.98  なお藤田は「新しいPTA活動」(項のタイトル)の項で、「一九四九年以降」から昭和27年の「義務教育国庫負担法成立のための陳情運動」までをとりあげている。
- 11) 以下、『教育時報』第5号(昭和23年6月)所収、無署名「P.T.A参考資料」p.24  による。
- 12) 以下、『P.T.A』(児童文化協会版)2-7(昭和23年9月)所収、編集部「P.T.A訪問記」p.43-45  による。  なお、この「健康相談活動」が子どもたちをも対象にしていたか否かは同論稿では明らかでない。ただ「小児科医」も相談医になっていたことから、対象にしていたのではないかと推測される。
- 13) 上掲(注12)訪問記には「1948.7.26記」と記されているが、一本化によるPTAの誕生はその5日前の7月21日であった。なお「母の会」の結成は昭和21年12月である。
- 14) 藤田秀雄・前掲(注10に同じ)p.98
- 15) ・「青少年特に学徒の不良化防止のため青少年教護に関する調査、研究、教育施設の充実、教育態度の改善、父母と先生の会の組織整備とその活ばつな運用(略)」(教育刷新委員会第23回建議「青少年社会教育の振興について」昭和23年8月14日)  
・「とくに現下の重要な社会問題の一つとしての青少年の不良化に対する対策について、P.T.Aの活動をとおして、世の父母の積極的な関心と活動が表面化してきたことは、P.T.A活動の大きな功績と思う。」

- （文部省見解、『社会教育』昭和25年2月号所収，無署名「資料欄」p.70）
- ・「不良化防止(略)この問題こそ，現在日本のP.T.Aが力を注いで然るべきです。」（愛知県教組主催・日本母性文化協会後援「教育委員会とP.T.A」講演会，昭和23年6月25日・名古屋市栄町小学校，講師——高橋己寿衛・田代愛教組文化部長・新井太郎本誌編集長，の「講演会場に於ける質疑に答えて 会場録音」，『P.T.A』（日本母性文化協会版）No.5，昭和23年8月，p.23
- 16) ・「（深谷中会長）現在のPTAの仕事としては不良化防止が第一ではないかと考えている。(1)楽しい学校にする (2)学校で自由放任に過ぎるのはいけない (3)学校と家庭で躰——勤儉，貯蓄，礼儀，克己，自制力，金使い，言葉，子供の外出——これらを芽生えのうちに善導すること。(略)／（深谷小会長）不良化は国を挙げての問題です。この為に子供の遊び道具を完備しつつあります。」（大里郡PTA連合会「PTAの現在と将来」，『SAITAMA P.T.A資料』No.2，昭和23年9月，p.9）
    - ・「男女共学の立前から，男女の交際は自由なわけであるが，今日の日本の状態から，一挙に自由な交際へと飛躍することは，考慮を要するので，現段階においては，学校外の交際については，両親の監督の下でなければ，男女の交際は認めていない。これについては，PTA側も，全面的に賛成を表している。」（豊多摩高校長・長浜 恵「生徒の自発活動と職員の私」，『教育じほう』37号，昭和26年2月，p.23-24）
  - 17) 田崎 正「P.T.A訪問記」，『P.T.A』（児文版）2-4，昭和23年5月，p.45，挿入は杉村
  - 18) 「茨城県下館小PTA」，『P.T.A教室』昭和27年1月，p.54-55
  - 19) 仙台市立東六番丁小学校PTA「私たちのPTA 母親学級四年間のみのり」，『日本P.T.A』No.48，昭和27年9月，p.52
  - 20) 田村富次郎「PTA巡礼ノート(一)」，『P.T.A教室』昭和26年9月，p.46
  - 21) 二部授業実施状況の統計数字を含めて，近藤修博（都教育庁指導主事）の「小学校の二部授業の問題」，『教育じほう』昭和24年11月，p.27-28
  - 22) 以下，全国的動向については『教育委員会月報』3-6（昭和26年9月）所収「学校給食に関する世論調査」，および『P.T.A教室』昭和26年11月号所収「学校給食はどうなるか」を参照。麴町小PTAについては『P.T.A教室』上掲所収「各地だより」を参照。
  - 23) 神崎 清「日本の婦人はPTAでなにをえたか」，『社会教育』昭和27年2月，p.27-28
  - 24) 藤田秀雄・前掲（注10に同じ）p.99
  - 25) 児玉佳子「特飲街とたたかうPTA 池上問題の教えるもの——母の熱意・PTAの努力——」，『日本P.T.A』No.30，昭和26年2月
  - 26) 「この運動の特ちょうはどこまでもPTAの運動として，政党政派に関係せず，又学童生徒をこの運動の為につかうことはしないということだった。」（上掲・注25に同じ，p.29）
  - 27) 二つの「証言」は，『日本P.T.A』No.30（昭和26年2月）所収「池上問題に私はこう思う」，p.33
  - 28) 以下，東京都目黒区第十中学校PTA「思い切って実行した講座」，『日本P.T.A』No.28，昭和25年12月
  - 29) 同PTA・前掲（注19に同じ）
  - 30) 田村富次郎「両親の一日入学」，『日本P.T.A』No.42，昭和27年2月
  - 31) 田村富次郎「目黒区不動小PTA」，『日本P.T.A』No.44，昭和27年4月
  - 32) 佐藤堅一『学校・学級P.T.A.運営の実際』（牧書店，昭和23年刊）所収 p.247
  - 33) 阿部 彰『戦後地方教育制度成立過程の研究』（風間書房，昭和58年刊），第八章・第一節およびp.674の注(10)
  - 34) 『日本P.T.A』昭和25年8，9月合併号・附録，p.114
  - 35) 「座談会 権威にすがるPTA」，『日本P.T.A』No.40，昭和27年1月，p.11-12
  - 36) 昭和22年2月，モデル規約の提示後「一見順調なすべりだしではあったが，第一軍団軍政部は，各学校における育友会の組織，運営上の刷新状況について，強い懸念をいただいていた。」その「懸念」とは端的に言えば，反民主主義的人物によるPTA支配のおそれであった。だから改訂規約の第5条に「役員資格」として，「(一) 戦時の団体に於て指導者でなかった両親及び先生，(二) 人民のよき代弁者，(三) 民主主義

に関し徹底した理解をもつ人 (四) 進歩的で社会制度の変化を認める人 (五) 人道的な理想をもつ人 (六) 進んで改革を行なう人 (七) 会員一人々々から色々の考えを引き出す能力のある人 (八) 教育に関し若干の基礎と理解をもつ人、(注意、役員たるには財産家であることを要しない)」の八カ条を新たに定めて、反民主主義的人物の役員就任を阻止しようとしたのである。さらに、不幸にして望ましくない人物が役員になった場合の“第2の防止策”として、第2条を改訂して“口出し”を規制したのであろう。なお、反民主主義的な望ましくない人物の中に、“反教組”的人物も含めていたのではないかということが、「北山メモ」から推測される。(阿部 彰・前掲、注33に同じ、p.635 および p.674-678 の注(10)(11))

- 37) 合田新介『木崎農民小学校の人びと』(思想の科学社、昭和54年刊) p.135
- 38) 宮原誠一・前掲(注4に同じ) p.57
- 39) 磯部光治「両親と教師が心を通わせるために」、『教育展望』27号、昭和26年8月
- 40) 『PTA教室』昭和25年9月号所収、「反省期に入ったPTA」(これは多くの人の意見を集めたものである) 引用文中の④⑤の記号および下線は杉村
- 41) 牧瀬菊枝「敗戦直後のPTA」、『PTA研究』159号、昭和61年1月、p.5
- 42) 本稿を脱稿して後、昭和61年10月18日に東京都新宿区の自宅に牧瀬菊枝氏を訪ね、以上の諸点をたしかめた。彼女はおおよそ次のように語った——「私はレッド・パーズということを知っていたが、他の親たちは知らなかったと思う。役員たちも必ずしも知っていたとはいえない。親たちは素朴、たちのいい意味での素朴であった。政治的なものは感じていなかったようだ。ただ、『よい先生が、なぜ?』というものだった。』(PTAは人事に口を出してはならないという行政指導について)「上からそのような指導があったとは聞いていない。私も知らなかった。みんな知らないから、まじめに一所懸命考えてやった。」
- 43) 牧瀬は「私が初めて通ったところの国分寺小学校のPTAといえ、まったく明るかった。まだ電灯も引かれていない夜の教室での会合だったが、みんなが対等に意見を述べあった。私も意見を堂々と述べ、みんながそれを討議してくれた。」(上掲・注41に同じ、p.5)と、同PTAの民主的な雰囲気や教師の熱心さ(夜の教室での会合に、当然教師も出席していたのであろう)を述べている。そのような条件が“口出し”をしやすくしたことはたしかであろう。
- 44) 以下、筆者の聞きとりノートから